



＜サッカー観戦だけではもったいない＞ プラスアルファで楽しむ マンチェスター

マンチェスターはイングランド北西部にある大都市で、西にリバプール、東にリーズに挟まれた場所にある。サッカーで名が知られる都市であり、プレミアリーグの強豪チームも二つある。（マンチェスター・ユナイテッド、マンチェスター・シティ）マンチェスターといえばサッカー、サッカー観戦を楽しむだけでも訪れる楽しみのある街である。（なお英国ではフットボールという呼び名が一般的だが、この紀行文の中では日本で一般的なサッカーという記載とさせていただきます。）そんなマンチェスターだが、例えば家族で訪れる場合、全ての人がサッカー大好き！というわけではないかもしれない。

そこで今回の旅はマンチェスターの街を歩き、サッカー観戦以外で楽しめるマンチェスターの過ごし方を探してきた。サッカー観戦だけでなく、そこにプラスアルファの違った楽しみ方を体験すると、マンチェスターの街の持つ個性、活力や多様性といったものを感じることできるだろう。

2月の或る土曜日の朝、私はロンドンイーストンの駅の大きな発車案内板の前で立ちつくしていた。悲しいことに予約していたマンチェスター行きの電車の横にはキャンセルとの表示。この国で電車のキャンセルは良くある話だが、自分がそれに当たると困る。身勝手だがこういう時には「電車は時間通りに動くもの」という日本人感覚が出てしまう。

駅のカウンターに並び、電車と座席予約を無事変更。そのまま指定された次の電車のプラットフォームへ行こうと思ったが、出発時間になってもプラットフォームが決まらない。しばらくしてプラットフォームが発表される。すると駅の中にいた人々が民族大移動のように目的のプラットフォームへ動き出す。こんなに多くの人がいんだと驚きつつ、そのまま電車になだれ込む。車内アナウンスによれば出発は更に20分ほど

遅れるらしい。満席で乗客があふれているため、可能であれば次の便に移ってほしいとの案内。そうか、だからみんな必死で走っていたのか。自分は事前に座席指定を受けていたので席が確保されたが、そうでない人はデッキや通路に立っていた。ロンドン～マンチェスターを移動する人の多さに改めて驚く。

当初予定していた時間より約1時間ほど遅く、マンチェスターピカデリー駅に降り立つ。改札を出て、そのまま駅の構内にあるVictory Over Blindnessの銅像を見る。第一次世界大戦100周年を記念して作られた7名の盲目の軍人の彫像で、目の高さを通行人と揃えるために台座が使われておらず、人通りの中では紛れてしまいそうな決して大きくはない像だが、見ていると色々と考えさせられる像でもある。

駅から歩きだす。素敵なプラスアルファ体験をたくさん探そうとマンチェスターの街を歩いていると、あちこちで蜂（Bee）のマークを見かける。蜂はマンチェスターという街のシンボリックな存在。諸説あるがマンチェスター市民の人が勤勉に働く姿を蜂に見立てた、また、蜂は皆で力を合わせ取り組む、といった意味があるようで、マンチェスターの市の紋章にもなっている。通る人を見ていると、若者が多く、人種も多様、LGBTQの案内も多い。街は高層ビルも多いが落ち着いた静かな通りなどもあり、大都会でもバリエーションに富んでいる。そんな中、ワクワクした気持ちで探検を進めていった。





さて、ここからはマンチェスターにある多数のプラスアルファ・スポットを紹介していく。最初はサッカー観戦の前後にぜひ立ち寄っておきたいサッカー関連のスポット2件から始めたい。サッカー観戦以外のプラスアルファを紹介することが今回の本題とおきながら、いきなりのイエローカードのようなスポット紹介で恐縮だが、サッカーを文化の側面から感じることができる場所として紹介しておきたい。

(プラスアルファ：文化としてのサッカー)

Classic Football Shirts Shop Manchester

サッカーユニフォームの古着店で、オシャレな看板が出ているだけの小さなお店なので気をつけないと通り過ぎてしまうかもしれないのでご注意を。中に入るとサッカーの中古ユニフォームがカラフルに所狭しと並べられている。ビンテージものも多く、最頂のチーム、選手などいなくても、さまざまなデザインを見比べているだけで楽しい。値札を見てビックリというケースもあるけど、ただふらっと立ち寄っても楽しい。例えば色やデザインだけでなく、素材なども見てもらうと時代の変化を感じることができ、この地でサッカーがいに長い歴史を持っているか感じられる。なお、目当てのものを血眼になって探している人も多いので、譲り合いの気持ちが必要。



National Football Museum

国立のサッカー博物館。4階建ての大型博物館で、英国のフットボール文化の発展の歴史を多数の資料から学ぶことができる。また子供が楽しめるようにフロアごとに展示の手法を変えており、小さい子供から老人まで楽しめるように趣向を凝らした展示になっている。Ground Floorの入口から入ると、Pitch galleryと名付けられたフロア。ワールドカップのトロフィーを前に写真撮影ができたり、小さな子供たちの工作場があったりする。なお、上のフロアに行く前にこの階にあるトイレに行っておこう。ちなみにショップやカフェもこのフロアになるが、そのまま出口につながっているためまずは上の階から見ていこう。

1階(日本の2階、以下同様)はMatch galleryのフロア。ここでは過去の名試合などを動画などで紹介しつつ、英国でどのように国民がサッカーに熱中するようになったのかを展示している。

2階はPlay galleryのフロア。子供たちも楽しめる、実際に体を動かすサッカー体験型ゲームのフロア。子ども連れの家族で結構な行列ができていますが、どの子も楽しそう。

3階はScore galleryのフロア。ここではテーブルゲームやテレビゲーム、パブなどにある大型のサッカーゲームなど、ゲームの進化を通じて、サッカーが一般的な文化になってきたもう一つの動きを紹介している。日本人にも懐かしいゲームも展示されており、なかなか楽しめるフロアになっている。インドアでゲーム好きの自分にはこのフロアが一番面白かった。

最後にショップに立ち寄る。個性的な土産が並んでいるが、国立の博物館だけあって、マンチェスターのチームに特化せず、プレミアリーグの全てのチームのグッズもあるので、お気に入りのチームがあればぜひ買って帰りたい。但しユニフォームなどはあまりないので、ご注意を。

なおこの博物館、事前にwebサイトから訪問登録をしておくことをお勧めする。当日ふらっとウォークインで訪れることも可能だが、その場合も結局受付で入館時間の登録をして決められた時間に再度来る形になる。Covid-19以降の変化かもしれないが、住所や電話など個人情報の入館時登録を求められることが増えているが、マンチェスターも例外でなく、ここ以外にも複



数のスポットで住所などの登録を求められた。



(プラスアルファ：ステンドグラス)

Manchester Cathedral

サッカー博物館から徒歩数分のすぐ近くにマンチェスター大聖堂がある。マンチェスターに来たらここはぜひ訪問したい。一歩中に入るとマンチェスターの街の喧騒から切り離された、荘厳で、どこか優しい空気が漂っている。1400年代から街の人々を受け入れてきた協会を母体として、マンチェスターの市民を精神的な面から支え、2回の世界大戦を経て現存する歴史もさることながら、木彫りのスクリーンやステンドグラスなども圧巻である。特に窓のモチーフとしては非常に珍しい戦禍を表したような「炎の窓」は必見。



(プラスアルファ：空間としての図書館)

The Portico Library

1806年にできた「マンチェスターで最も洗練された小さな建物」と呼ばれる図書館。入口を入り小さな階段を上っていくとメインルームであるやや広い場所に到着する。周りの書棚には古い本が所狭しと並んでいる。この図書館は、マンチェスターが「近代都市」として成長していた時代に、400 人の創立購読者によって設立された。最初の頃の読者（会員）としてはマンチェスターの作家、科学者、教育者など知的文化

人が集まっていたそうだ。マンチェスターの文化的発展を担った図書館であり、マンチェスターの歴史や文学などについての展示がされている。この図書館のお勧めはメインルームの中央にある小さなカフェスペース。小さな図書館ではあるが、目の前の書棚の前に200年以上の間に多数の人が立たずみ、この空間を過ごした歴史を感じながら時を過ごすことができる。

John Rylands Research Institute and Library

マンチェスターの目抜き通りであるディーンズゲートにある図書館。ここも実に独特の雰囲気を持った空間が魅力の場所である。有名な魔法使いの少年の映画に出てきそうな雰囲気の通路など、歴史的建造物の空間が持つ迫力を感じられる場所である。この図書館は、1888 年に亡くなったマンチェスター初の大富豪ジョン ライランズを追悼するためにその妻エンリケタ ライランズによって設立された。ヨーロッパのネオ ゴシック建築の最も優れた例の一つと言われており、1972 年に名門マンチェスター大学の一部となっている。この図書館を見るためにマンチェスターに来る人もいるそうで、実際にしてみるとそれも納得の場所である。



(プラスアルファ：マンチェスターの街の変化を感じる美術館・博物館)

Manchester Art Gallery

マンチェスター中心にある大きな美術館。こちらも他の歴史的建造物同様に1800年代初頭である1823年に開館。世界で最初の鉄道といわれるリバプール・アンド・マンチェスター鉄道の開通が1830年であることが表すように、産業革命と共にマンチェスターは



成長してきた。しかしその当時、文学や芸術は一部のエリート男性のみが触れることができる限られたもので、そこには偏見も多かったであろう。市民の多くは労働者であり、産業革命で進歩する技術と共にただひたすら街の成長に貢献してきた。そういう社会構造の変化と庶民の力のようなものを映した絵画をここでは多数見ることができる。特にフランスの画家で多くのマンチェスターの都市風景を描いた Adolphe Valette (1876 ~ 1942) のコレクションは秀逸。スチームパンクの時代感を印象派の画風で切り取ったような、そんな絵画を見ることができる。



Salford Museum & Art Gallery

マンチェスター中心部からバスで10分ほど東に行ったところに Salford 大学がある。その広大な敷地の比較的入り口に近いところにこの博物館はある。1850年に王立博物館そして公共図書館として開館したこの博物館は昔のサルフォードの人々の生活を説明するコレクションに加え、ビクトリア朝の美術コレクション、英国現代美術のコレクションなどを展示している。また地元サルフォードの歴史を記録した地図や写真を展示する郷土史図書館がある。

私がこの博物館を訪問した一番の理由は、この博物館 Ground Floorにある Lark Hill Place という展示場を見たかったことにある。この空間は昔の街並みを再現した実寸大のジオラマのような場所で、1957年にサルフォード中心部の多くの店舗や住宅が再開発のため取り壊されていた際に保存された店先を使って博物館内に建てられたものとのこと。ビクトリア朝時代の街並み、証明、音声などが再現されており、その当時の街に入り込むタイムスリップのような体験ができる。決して広いスペースではないが、オブジェの一つ一つが実際に使われていたものを使いながら再現されているだけにリアルである。



Science and Industry Museum

マンチェスターは産業革命のトップランナーとして有名だが、歴史的には1700年代終盤に紡績機に蒸気機関が導入されて以降、綿工業と共にマンチェスターの産業革命は加速した。そしてマンチェスターで製造された綿織物を運ぶためにリバプールとの間で世界で初めての鉄道が開通することになる。この博物館ではこの産業革命と綿工業と共にマンチェスターがいかに工業化を進めていったのかを当時の工場機械と共に学ぶことができる。

もう一つ、科学博物館としての展示もあり小さなお子さま連れの方などは、そちらの展示や体験スペースの方がより楽しめるだろう。なお、現在大型リノベーション中のため、展示も限られている。リノベーションが進んだらぜひ再訪したい場所である。



(プラスアルファ：ダブルデッカーバスの歴史)

Museum of Transport, Greater Manchester

マンチェスター中心部からバスで30分ほど北に行ったところに英国で有名な2階建てバスのクラシックカーを見ることができるマンチェスターの交通博物館がある。1800年代後半の馬バスから始まり、1階建てのボンネットバス、そして1900年代中盤からのダ



ブルデッカーなどのクラシックバスが所狭しと大量に並んでおり、一つひとつのバスに説明がついており、バスの変化を通じて当時の庶民の生活や自動車技術の変化などを知ることができる。いくつかのバスには乗車して中を見ることがもできる。またバス会社乗務員の当時の制服や券売のための機械なども見ることができ面白い。歩き疲れたと感じたらぜひ博物館の中にあるカフェで一休みをお勧めしたい。おそらくバス会社関連のOBの方かもしれないが、年配のウェ이터数人が親切丁寧に対応してくれるとても気さくな雰囲気のカフェ。値段もリーズナブルなので小腹が空いたらホットサンドなどを軽く食べても楽しい。



(プラスアルファ：その他…)

ここまでいくつかのプラスアルファを紹介してきたが、他にもマンチェスターならではのプラスアルファは多い。例えばBBCによる方針変更で翻弄され一度は解体の憂き目にあいながらも復活したBBCフィルハーモニックや、マンチェスターの都市の中でも特に目立つ高層ビルであるBeetham Tower、ちょっと足を延ばせば巨大ショッピングモールや水族館など楽しみ方には事欠かない。

帰りの電車で揺られ暮れゆく空を眺めながら今回の旅を振り返る。エキサイティングな都市滞在であったが、行きたいと思っていた行けなかったところもたくさん残ってしまった。それだけマンチェスターは見るところが多いということだろう。近いうちの再訪を心に誓った。

ジャルパック 中井策太郎

マンチェスター中心部イメージ図 (実際の縮尺や方位と異なります)

